46

江戸時代の化粧と医療

――『容顔美艶考』と『都風俗化粧伝』分析を中心に

鈴木則子

日本で庶民女性の化粧習慣が確立・普及するのは江戸時代である。だが庶民を対象とする化粧書の刊行は大変遅く、十九世紀に入ってからで、一八一三年の『都風俗化粧伝』と翌年の『容顔美艶考』まで待たねばならない。本報告では、この二書を基本的な史料としつつ、それ以前に刊行された江戸時代の女用物と呼ばれる女子教育書や女性向け実用書の中の化粧関係の記述と比較分析して、医学・医療が幕末期の化粧意識に与えた影響について考える。

江戸時代、「女用物」と総称される女性向けの実用書は数多く刊行されるが、前述の如く庶民女性向けの化粧専門書は幕末までなく、従来は女子教育書の中の一部分に取りあげられるに過ぎなかった。しかもそれらの記述は過度な化粧をたしなめ、夫に対する礼儀としての化粧を勧めるために書かれているため、具体的な化粧技術を教えてはくれない。その根底にあるのは、生まれ付きの容姿は化粧で変えられるものではなく、女性は容色よりも精神の修養と家事の習得を心がけるべきであるという儒教道徳だった。

だが十八世紀後半から女用物の化粧記事の記述のトーンに変化が現れはじめる。『女教艶文庫』（一七六九年）は儒教の教える女性の「四行」の内の「婦容」を拡大解釈し、単なる身だしなみではなく美しくなるための化粧を奨励した。そして従来非難されてきた美貌によって玉の輿に乗る女性を、自分を美しく見せる努力を惜しまず、またその術を心得た聡明な女性として賞賛したのである。

この流れは前掲『容顔美艶考』と『都風俗化粧伝』において、さらに大きな展開を見せる。『容顔美艶考』はその序文で華やかな大坂女性を賞賛し、本文では季節や目的、生活状況に応じた化粧法を説明する。例えば四季微妙に変化する肌の状態に応じた、崩れにくくて顔色が美

しく見える化粧法、真昼の屋外の花見や燈火の下での夜の集まりといった光線の状態に応じた化粧法、芝居見物などの華やいだ場での化粧法などの記事が並ぶ。また後半では様々な顔の欠点を紅や白粉で補正する方法も紹介する。

『都風俗化粧伝』は『容顔美艶考』に見られる化粧技術をさらに詳細に図入りで紹介するとともに、美白としわ取りを目的とする美顔術や薬方、ほっそりとしなやかな手足を作るためのマッサージ法を記す。これらの美容法は単に身体の表面を美しく繕うだけでなく、『本草綱目』にあるような薬方や、按摩・導引の医療技術を導入して、気血の状態を整えることにより身体の内部に働きかけて全身の美しさをめざすものだった。

このように、化粧や薬、按摩・導引によって身体をより価値のあるものに作り替えようという発想が庶民女性にまで普及するのは、十九世紀前後の社会がもたらした現象である。念入りな化粧技術や『本草綱目』が記載するような美容法の情報を、書物を媒介として貴族や遊女ではなく庶民女性が収集するという構図は、それ以前の社会では考えられない。その背景には江戸時代後期の経済発展と都市社会の成熟に裏付けられた、女性の教育レベルの向上、都市女性労働人口の拡大、女性の自意識の形成、化粧品業界の成長や化粧情報媒体としてのメディアの展開といった、社会の近代化に向けてのさまざまな変化を指摘することができる。

（奈良女子大学）